

## 日本人における「苗字の重視」と英語教科書に見る呼称の問題 —「初対面」の場を中心に—

橋 広司

### キーワード

日本人, 呼称, 苗字, 中学校英語教科書, 初対面

### はじめに

英語の国際的普及に伴い、現代における内外の英語教育はコミュニケーション能力を重視する方向へと進展してきた<sup>(1)</sup>。日本の英語教育研究においても、いかにして実践的な運用力を向上させるかという議論には枚挙にいとまがない。しかし、一方で「誰の(どのような)英語を教授すべきか」という問いに対しては、必ずしも十分な検討がされてきたとは言えない。英語非母語話者が、国際的な場において自らの母語を差し置いて、英語で意思を伝えようとするとき、一体誰の英語を使うべきか。アメリカ人やイギリス人の英語だろうか。どのような英語であれば民族的アイデンティティを保持できるか、あるいは少しでも母語使用時に近い自己表現が可能か、という観点からこの問いに答えると、現代に生きる我々は、意思疎通の許すかぎり諸民族の価値観を組みこんだ民族固有の英語を使用すべきではないかということになる。これは、世界の価値観を一元化に向かわせるのではなく、価値観の多様性を尊重する精神に依拠する主張である。

本稿で取り上げる、日本人における呼称の問題とは、現行の文部科学省検定済中学校英語教科書(以下、教科書)の中で、日本人登場人物が自己紹介をしたり、第三者を紹介したり、相手に呼びかけたりする際の呼称として「苗字」ではなく「下の名前」<sup>(2)</sup>が用いられることが多いという点である。これは、日本人のアイデンティティや価値観に影響を及ぼす大きな問題であると言える。なぜなら、出会ってすぐに相手を下の名前で呼んだり、自らを下の名前で名のったりする習慣は、日本の文化ではなく英語の母語話者の文化によるものだからである。イギリスやアメリカでは、苗字で呼びかけることが距離を置いた、仲間扱いをしていない意思表示となり、むしろ失礼にあたることがある(久野 1977)。しかし、日本社会では自分を苗字で名のったり、相手を苗字で呼んだりすることが多いし、少なくとも初対面の相手に向かって下の名前で声をかけるなどということは考えられない。このことは、とりわけ初対面の場では、大人のみならず教科書の登場人物のような中学生同士の関係においても言えることであろう。

本稿の目的は2つある。①教科書(2005年度版)を調査し、日本人登場人物が初対面の場において苗字ではなく下の名前を用いる傾向にあることを証明すること、②日本人にとっての苗字の歴史的・社会文化的重要性を考究することである。「英語を学ぶのだから、英語の母語話者に倣うべきだ」という向きもあろう。しかし、冒頭で述べたように、今日英語は世界の多

くの地域で、さまざまな民族によって使用され、Englishes というようにしばしば「複数形」で捉えられるようになってきている<sup>(3)</sup>。学校英語教育が世界の言語や文化の多様性を尊重する異文化理解教育を標榜する以上、このような「複数の英語」を認め合う精神を養っていくべきだというのが筆者の立場である。

とは言え、多様な英語変種を教科書に取り入れることで文法構造をも揺るがし、学習の基準を見失うような、急進的な改革を推し進めようというのではない。本研究は、異文化理解教育としての英語教育という観点から、日本人における苗字の重要性を再確認し、さしあたってその価値観を日本人が使う英語に組みこむことに限定して、教科書に対する指摘と提案を試みるものである。なぜなら筆者は、「苗字の重視」は日本人を日本人たらしめている構造の重要な一項目だと考えるからである。国際補助語としての英語の一例である「日本英語」を提案する森住(1997)は、日本人は英語を書いたり話したりすると、苗字と下の名前の順序を逆にして表す傾向があるとして、これを「個人や民族のアイデンティティ及び異文化間理解への抵触」という理由から問題視している(森住1997:30)。また、日野(2003)では、英米式に限定されない国際英語の教材についての提案をしており、日本人に名前で呼び合うように指示することや、お辞儀ではなく握手をせよと指導することは、「国際英語における自己表現の立場とはあいにくにくい考え方である」(日野2003:369)と述べている。筆者の立場はこうした先行研究と軌を一にする。本稿では、まず教科書における日本人の呼称の調査と分析および考察を行ない、そのあとで、日本人における「苗字の重視」について歴史的・社会文化的視点からの考察を試みる。そして最後に、今後の教科書への提案を述べることにする。

なお、教科書編纂の現場においては、教科書検定や出版事情などとの関係もあり、筆者の意向のすべてが教科書に反映されるわけではないと聞かすが、それを承知の上で、決して特定の教科書や執筆者の非難ということではなく、あくまで筆者の考える理想の英語教科書のあり方について論ずることを本稿の趣旨とすることを付け加えておく。

## 1. 教科書における日本人の呼称の問題

### 1.1 教科書における実例

本研究では、6種類の教科書からそれぞれ第1巻を調査の対象とした。どの教科書でも自己紹介や第三者の紹介は第1巻で扱われており、登場人物の名前が最も頻繁に現れているからである。分析に使用した教科書は、*Columbus 21 English Course 1*(光村図書)、*New Crown English Series 1*(三省堂)、*New Horizon English Course 1*(東京書籍)、*Sunshine English Course 1*(開隆堂)、*Total English 1*(学校図書)、*One World English Course 1*(教育出版)である(これ以降、CO、NC、NH、SE、TE、OWとする)。無論、こうした国民の価値観にかかわるような調査は、社会的背景の推移に照らし合わせた通時的な観点による研究も必要であるが、紙幅に限りがあるため別の機会にゆずり、本稿では共時的視点から、現行の教科書に限定して論ずることにする。

方法としては、各教科書の対話文中に見られる日本人による発話を、「自己紹介」、「第三者

の紹介」, 「呼びかけ」の3場面に分類し, 日本人が自分の, あるいは他者の名前をどのように表現しているかを検証する。調査対象の課は, 「自己紹介」については, 自己紹介の仕方を学習する課 (TE:4 課, その他の教科書:1 課) とし, 同様に「第三者の紹介」についても, その仕方を学習する課 (CO:3 課, NC:2 課, NH:2 課, SE:1 課, TE:5 課, OW:2 課) とする。「呼びかけ」に関しては, 上記の課を中心に初対面のシーンが見られる課から拾うことにする (CO:2・3・4 課, NC:1 課, NH:2 課, SE:1 課, TE:4・5 課, OW:1・2・3 課)。なお, 各項目において苗字には\_\_\_\_\_, 名前には\_\_\_\_\_を添える。

#### 「自己紹介」

CO: Hi! I'm Yamada Hiroyuki.

NC: I am Tanaka Kumi. / Hello. I'm Ken. / Hello. I'm Kato Ken.

NH: I'm Emi. / I'm Shin.

SE: Hello, I am Yuki.

TE: I'm Aki. / I'm Shun.

OW: Hello. I am Akiko.

#### 「第三者の紹介」

CO: This is Kazu and This is Daisuke. / That's Mr. Ogawa. / He's Mr. Hoshino. / That's Ms. Brown.

NC: This is Emma.

NH: Ms. Green, This is my friend Mike. / Mike, this is Ms. Green.

SE: Andy, this is my friend Takeshi.

TE: (日本人による発話はなし。)

OW: This is Minh.

#### 「呼びかけ」

CO: Oh, hello Jenny. / Nice to meet you, Jenny. / Hi, Sarah.

NC: Hello, Ratna. / Nice to meet you, Ms Miller.

NH: Ms. Green, this is my friend Mike. / Mike, this is Ms. Green.

SE: Andy, this is my friend Takeshi.

TE: You are very good cook, Jim. / Mihi, where are you from?

OW: Nice to meet you, Ms. King. / Are you from America, Ms. King? / That is your seat, Minh. / Do you like music, Lisa?

### 1.2 分析と考察

「自己紹介」の場面では, CO と NC に「苗字 + 下の名前」による発話が見られるが, 他はすべ

て下の名前のみの自己紹介である。COでは、“I’m Yamada Hiroyuki.”の直後に“Call me Hiro.”と続いており、苗字ではなく下の名前で呼ぶよう仕向けている。実際、ひとたび自己紹介が終わると、Hiroyukiは一貫してHiroと呼ばれ、第2、3巻の巻頭の登場人物紹介ページでは、もはやHiroという愛称だけが、あたかも本名のように示してある。この教科書は、主人公Hiroと、Hiroの家にホームステイしているアメリカ人留学生Jennyの交流を描いた物語であり、Columbus 21というタイトルの他に、“Hiro and Jenny”という副題が付いている。敗戦直後に国民の絶大な支持を得た教科書“Jack and Betty”はアメリカ人ふたりの物語であった。当時の日本人は、言わば憧憬のまなざしでアメリカ人を見ていた第三者である。それが今日の教科書では、日本人は自ら英語を駆使して語る主人公であり、日米間の異文化交流をはかる立場にある。このことは、現在の教科書における日本人の主体性を象徴しているとも言えよう。しかし、ここで筆者は、かつて中曽根康弘が、ロナルド・レーガンとアメリカで会談を行った際に、お互いをファーストネームで「ロン、ヤス」と呼び合う「対等な関係」を築くことに成功したという報道を想起するのである。これは「対等な関係」ではなく、中曽根氏がアメリカ式のルールに従っただけのことであった。アメリカでの出来事なので、向こうの土俵に上がるのは当然で、取り立てて問題視することではないという意見もあるが、このことについて鈴木（1999）は「アメリカの大統領が日本に来たときは、呼称は言うまでもなく、その他一切を日本式にやるのでなければ、相互主義にもとづく対等の関係とは言えない」（鈴木 1999:154）と述べている。無論、政治家の言動と教科書のダイアログを同じレベルで考えるわけにはいかない。しかし、COに限らず、すべての教科書が場面設定のほとんどを日本としていることを考えると、総体的な苗字による自己紹介の少なさには、どうしてもバランスを欠いた感があると言わざるを得ない。

「第三者の紹介」の中で苗字が見られるのは、COのMr. Ogawa, Mr. Hoshino, Ms. Brownと、NHのMs. Greenである。これらはいずれも生徒が先生を紹介する場面であるので、さすがに苗字を用いるのは当然であろう。しかし、その他の例では、すべて下の名前のみの紹介となっている。名前の中でもとりわけ指摘したいのは、COのKazuである。巻頭の登場人物の紹介ページには、“Kazu”という名前が表記されている。その下に「カズ - ヒロの同級生」という日本語が添えてあることや、「カズ」という名前自体が日本人の正式名称としてはいささか不自然であることなどを考えると、「カズ」はおそらく正式な名前ではなく、「ヒロ」と同じ愛称名ではなかろうか。そうだとすると、苗字が使われないだけでなく、下の名前でさえも日本人としての正式名が付与されず、愛称名で済まされていることになる。

TEに関しては、日本人による発話が見られなかった。その代わりに、アメリカ人のJimが、日本人のAkiとShunと、マオリ人のMihiをお互いに紹介する場面がある（p.51）。Jimのセリフは、“Aki, Shun, this is Mihi. Mihi, this is Aki and Shun.”であり、紹介された3人は握手をする。登場人物は、少数民族を含む多民族の様相を呈しているが、アメリカ人のJimが中心となり、母語話者の規範によって会話が進められている。この課の最後にあるActivitiesには、「3人1組になり、例にならって友達を紹介しあいましょう。」とあるが、例文中に使われている呼称

も, Judy, Rika, Maki, Takuya, Ryo, Matt とすべて下の名前であった (p.54)。

最後に「呼びかけ」であるが、ここでも苗字が使われているのは、教師に対する場面のみであり、その他はすべて下の名前による呼びかけであった。ただし、例えば CO の “Nice to meet you, Jenny.” は、その前に “Hi. I’m Jenny.” という自己紹介の布石がある。つまり、相手が下の名前で自己紹介をするから、それに応じて下の名前呼びかけているのである。他の教科書にも見られることだが、このような文脈での下の名前による呼びかけは、相手の文化への配慮として捉えることもできよう。しかし、やはりここでも、総体的な苗字の出番の少なさを見ると、バランスの悪さが目立つことは確かである。実際 CO では、アメリカ人少女の Jenny が来日した日、ヒロの母親は空港で Jenny を見つけ、開口一番 “Are you Jenny?” と尋ねているのである。本来、日本人にとって相手を下の名前と呼ぶことは、ある程度親密な間柄になるまでは大変に難しいことである。ましてや初対面においては起こりえないことだと言ってもよい。それが、英語を話した途端にできてしまうということは、使う言語ばかりでなく精神をも取り替えてしまったということになる。これが、英語教科書における母語話者志向の危うい点である。

分析の結果、どの項目でも、下の名前だけの使用が一番多く見られた。しかし、フルネームが使われている場合は、すべて「名+姓」という母語話者式ではなく「姓+名」という日本文化式であることがわかった。また、フルネームの使用が見られたのは、「自己紹介」の場面のみである (CO, NC)。CO, NC の他に、課外ではあるが、TE の巻頭のカラーページには、“I’m Sato Takao.” という教師から生徒への自己紹介シーンが見られる。「自己紹介」は、初対面の相手に自分自身が誰かを知らせる行為であるから、フルネームを使う傾向があるのかもしれない。いずれも日本式の順序であることは評価できるが、しかし、我々は日本社会において、苗字のみで自己紹介を済ますことも少なくない。無論、公式な場 (上述した TE の教師の場合など) ではその限りではないだろうが、初対面にして相手に下の名前を明かすこと自体が、日本人の習慣ではそう頻繁に起こりうることではないとも言える。ある程度の間柄の友人の、下の名前を知らないことにふと気づくといった経験をもつ人もあるだろう。そのような観点からすると、「苗字のみ」の使用が見られてもよいはずだが、教科書の「自己紹介」では一切見られないことに、日本人のアイデンティティや価値観に対する配慮の不十分さが窺える。

## 2. 日本人と「苗字の重視」

ここでは、日本人にとっての苗字の歴史的・社会文化的重要性を考察する。英語教科書の調査から日本文化論的な考察へ論点を移行することは、いくぶん唐突であると思われるかもしれない。しかしながら、苗字の重視が日本人の精神に深くかかわるものであれば、英語を使用する際にも呼称に関する配慮は必要であろう。日本人のアイデンティティや価値観を組みこんだ英語について論ずる以上、日本文化論的視点は不可欠なのである。

日本社会において、苗字とは代々継承される「家・家族の名」とであると言える。とは言え、誰もが苗字を持つようになったのは明治時代初期に戸籍制度がつくられたときであり、それ以前は苗字を持たない者もいた (武光 2007)。このことをもって、苗字とはさほど歴史的に日本人



の精神構造に影響してきた事柄ではないとする主張もある。しかし、2.1以降で見ていくように、日本人は古くから家や家族の全体性を尊重する価値観を持っていた。その全体性を指示する「名前」を持たなかつただけである。つまり、明治時代以降の日本人が苗字に対して抱く精神的価値それ自体は、戸籍制度とともに突如として現れたものではない。むしろ、現在誰もがもつ苗字とは、古くから存在する日本人の「家・家族」の全体性における精神の近代的象徴とも言うべきもののなのである。

## 2.1 日本人における家と家族

一般に、欧米人に比して、日本人は「家族」や家族の全体性を意味する「家」という概念を重視する民族であると言われがちである。「家族ぐるみ」という言葉があるように、個人は家族の一員として捉えられる傾向が強いのである(中根1967)。家族の誰かが代表として外部の人間の前に出るとき、あるいは何らかの大舞台に立つとき、「××家の看板を背負う」という表現を使うこともある。こうした家族の全体性の尊重は、平安時代、寛弘二、三年(1005～06)頃に成立したとされる「拾遺和歌集」にも見ることができる。次の歌は、菅原道真が元服を迎えた折にその母が詠んだものである。

久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな

月に生えているという桂の木を折るほどに大いに学業に励み、名を上げ、我が家の名も高めておくれといった意味である。この歌からは、一成員の名が上がることで家族の名も上がるという家族重視の考えが窺える。こうした日本人の感覚は現代にも引き継がれており、また「家族」という括りにとどまらず、個人の属する社会、例えば学校や会社などにも及ぶ。自分の帰属する社会の外に一步出ると、人はその看板を背負うことになるのである。国外へ出るときには「日本」という看板を背負うのであり、「国家」とは国を家と見立てた表現に他ならない。芳賀(2004)は日本人が持つ「所属集団」という概念について次のように述べている。

アメリカ人は初対面の相手に向かって真っ先に自分の名前を言います。日本人は勤め先の名を言い、自分の名前は場合によっては省略してしまいます。相手も、勤め先の名をまず聞きたがり、それを知って納得し満足します。つまり、所属集団優先です。(芳賀, 2004:78)

家族は個人の属する最も身近な集団であると考えたとき、日本人は英語圏の国の人と違って真っ先に下の名前を言ったりはせず、所属集団である家の名、すなわち苗字を優先させるといえる。下の名前を聞かすとも相手はそれで満足するのである。日本語の「兄弟」と英語の“brother”を比較すると、ちょうどこの逆のことが言える。つまり、日本人であれば自分の兄弟を「兄です」、「弟です」と紹介するが、英語圏の人には兄弟における長幼を特別明かす習慣はないし、聞き手は明かされずとも“He is my brother.”で満足するのである。

個人が家族という集団の一員であることの重要性は「家同士の結婚」という日本人の結婚観

にも表れている。式場には「××家・××家結婚式」という文字が掲げられ、「両家の益々の発展を祈念して」と言って盃を交わす。また、葬儀においても「××家式場」とするのが普通であるし、墓の石碑には個人名ではなく「××家之墓」、あるいは「××家先祖代々之墓」などと刻まれるのである。

著書『風土』(1935)において自然環境と人間の精神構造の関連を追及した和辻哲郎は、牧場、砂漠、モンスーンの三種類の風土を設定し、家族としての人間関係はこの三種の間で明白に相違しているとした。和辻は、その中で家族的な生活の共同に最も強く重心を置いたのは、牧場の文化や砂漠の文化ではなく、モンスーン的な家族観を持つ日本や中国における「家」の文化であると述べ、日本人の存在の仕方としての「家」について、以下のように述べている。

特に「家」の本質的特徴をなすものは、この全体性が歴史的に把握せられているという点である。現在の家族はこの歴史的な「家」を担っているものであり、従って過去未来にわたる「家」の全体性に対し責任を負わねばならぬ。「家名」は家長をも犠牲にし得る。だから家に属する人は親子・夫婦であるのみならずさらに祖先に対する後裔であり後裔に対する祖先である。家族の全体性が個々の成員よりも先であることは、この「家」において最も明白に示されている。(和辻1991:170)

つまり、日本人にとっての「家」や「家族」というものは連綿と受け継がれるものであり、「歴史的に把握」されるものなのである。そのことが日本人に、「家」や「家族」に対する責任感を与え、それらを重要視されるべき存在たらしめているのである。

このように個人の存在を家という歴史的な連続体の中で捉える日本人が、代々世襲される家の名ともいべき苗字を重視するのは当然のことと言えよう。また、家族の集団全体の象徴である苗字を、個人のものである下の名前より優先させるということは、和辻の「家族の全体性が個々の成員よりも先である」という言葉にも整合すると言える。

## 2.2 日本人における「ウチ」と「ソト」の概念

「家」を重んじる日本人は、「うち」と「そと」をはっきりと区別する民族でもある。それは、「家」と「うち」を同義に把握したり、「うちはうち、よそはよそ」といった表現を使ったりすることからも窺える。また、家族は「身内」であり、夫は妻を「家内」と呼ぶ。その一方で、家族の集団の外にいる人間は「よそ者」である。「内輪」での振る舞いは、「そと」の者と接する際には「対外的」な「外面」に切り替えられる。高島(1992)は、日本語の「いっていらっしやい/いってまいります」と、「おかえりなさい/ただいま」を、「うち」と「そと」を区別して使われる挨拶であるとしている。英語では、これらの挨拶はそれぞれ“good-bye/good-bye”と“hello/hello”であり、「うち」でも「そと」でも変わらぬ表現であるのに対して、日本語では、「うち」に残る者と「そと」に出かける者が、役割に基づいた表現を使うのである。和辻(1935)は、「うち」「そと」の構造は「家屋としての家」にも反映しているという。すなわち、「そと」と「うち」の間には垣根や門を施してしっかりと仕切る一方で、家の中においては個々の部屋に鍵などついておらず、ふすまと障子という相互の信頼のもとでの簡単な仕切りがあるだけだということである。『『うち』としてはまさに『距てなき間柄』としての家族の全体性が把握され、それが

『そと』なる世間と距てられる」(和辻1991:173)のである。

『「甘え」の構造』(1971)において日本人の心理と日本社会の構造を分析した土居健郎もまた、「うち」と「そと」に言及している。

遠慮の有無は、内と外という言葉で人間関係の種類を区別する場合の目安となる。遠慮がない身内は文字通り内であるが、遠慮のある義理の関係は外である。しかしまた義理の関係や知人を内の者と見なし、それ以外の遠慮を働かす必要のない無縁の他人の世界を外と見なすこともある。いずれにせよ内と外を区別する目安は遠慮の有無である。(土居2007:62,『「甘え」の構造』増補普及版、弘文堂による。)

土居は、身内に無遠慮なのは「甘え」が原因であるとしている。「内弁慶」なるものも身内への甘えからくるものであるという。土居は家族の関係を、無遠慮な間柄であると表現しているが、これは和辻の言う「距てなき間柄」と同等のものとして捉えることができるだろう。

このような観点から、「苗字の重視」について考えてみよう。自己紹介をし合ったり、名前を呼び合ったりする仲が「遠慮を働かす必要のない無縁の他人」という相互関係の上に成り立つことは考えにくい。むしろこのような関係は、「遠慮のある義理の関係」であるとするのが自然であろう。そしてこの「遠慮」というものが、日本人が「そと」の人間を「下の名前」で直言せず、「苗字」で呼ぶということの一因となっているのではなかろうか。「遠慮」とは、「遠く慮(おもんばか)る」と書く。つまり、あれこれ相手のことを思って考え、控えめに振舞うことである。日本人のコミュニケーションは良くも悪くもお互いが一定の心的距離を保ち、相手から離れた遠いところにおいて行われる。そもそも日本語の「あなた」というのは、英語の“you”とは違い、「向こうの方」という意味であり、話者は相手を遠くに見ることで尊敬の念を表すのである(外山1976)。英語の母語話者には、相手に向かって、“you”と直言する傾向があり、むしろ堂々とした姿勢が美德として捉えられがちだが、日本語では「遠慮」が働くのである。もちろん遠慮の要らない間柄というものが家族以外に存在することもある。しかし、そのような関係は心の「うち」に入ることを許された者との間柄に限られる。例えばそれは、家族の一員のように「甘え」が許された「親友」であり、将来「うち」の人間となりうる恋人であろう。

谷崎潤一郎に『痴人の愛』(大正13年発表)という作品がある。大正末期の性的に解放された日本社会の風潮を背景にしたこの作品は、15歳でウェイトレスの西洋人じみた少女ナオミと、少女に眼をつけた生真面目なサラリーマン河合譲治との男女関係を描いたものである。譲治がナオミを追いかけるようになったきっかけは、「名前が気に入ったから」であり、「「奈緒美」は素敵だ、NAOMIと書くともまるで西洋人のようだ」と思ったからである。親密な仲になりたいという気持ちと、何よりも魅力的な名前であることから男はナオミを「ナオミちゃん」と呼ぶ。小娘のほうは男を「河合さん」と呼んでいたのであるが、「お伽噺の家」と称するハイカラな文化住宅にふたりで入居した日を境に、男に対する呼称は変わる。「ナオミちゃん、これからお前は私のことを「河合さん」と呼ばないで「譲治さん」と呼び。そしてほんとに友達のように暮らそうじゃないか」と、男は言いかせるのであった。日本人が相手を下の名前で呼ぶに至る



には、それ相応の間柄になるための時間が必要であることが窺えよう。

つまり、日本人が初対面の人間（「そと」の人間）に向かって、苗字ではなく、下の名前で呼びかけるということは、人の家の垣根を飛び越えて「うち」へ土足で上がりこむようなものなのではなかろうか。

ここまでの考察をまとめると、日本人における「苗字の重視」には、2つの理由が考えられる。すなわち、①家族の全体性の優先、②「そと」の相手に対する遠慮、である。①は、自らを他者に紹介する際には、個人よりも家族の全体性を優先させて、苗字を名乗るということである。また、相手の名前を呼ぶ際には、相手の「家」に敬意を払い、苗字で呼ぶのである。さらに、呼びかけの際には、②の「遠慮」という装置が働き、相手を慮（おもんばか）るが故にたやすく下の名前を呼ぶようなことはしない。これらは、いずれも日本人のアイデンティティの根幹にかかわる価値体系を形成している要素である。

### 3. 今後の英語教科書への提案

第1, 2章に述べてきた観点から、最後に今後の教科書への若干の提案を試みたい。第2章での考察によると、「苗字の重視」は日本人の精神に深く根づいている価値観であると考えられる。そうであれば、このことは日本人を主体とした異文化理解教育を標榜する今日の英語教育において、蔑ろにされざるべき事柄だと言えよう。1998年版の中学校学習指導要領外国語編（以下、指導要領）では、教材は「実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したもの」であるべきだとしたうえで、以下のア、イ、ウ、に留意することとしている。

- ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。
- イ 世界や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。
- ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。（文部科学省 1998:95）

つまり、視野を広げ、世界の多様な文化や価値観を理解する視点を持つこと、そして日本の文化や日本人の価値観もその多様性を保持している一成因であることなどに重きを置くことが、教科書に求められているのである。その観点から見て、本稿で論じてきた呼称の問題が示すものは何か。今日の教科書は、日本人をはじめ登場人物の多民族化、多国籍化をこそ果たしたものの、異文化理解教育としての本質的な変革には至っていないのではないかということである。換言すれば、現在の教科書は脱英米化され、日本人を主体とした多民族空間に様が変わりたと見られがちであるが、その実、登場する日本人やその他の民族は母語話者の規範に則り、その価値観を共有しているにすぎないという側面が見られるのである。中村（2004）の言葉を借りると、今日の教科書は「装いこそ変わっても『ジャック・アンド・ベティ』の世界と本質的に変わらない」（中村 2004:125）とも言えるだろう。

英語教科書が「装い」だけでなく、本質的に多民族志向、日本人主体のものに変わるためには、日本人登場人物に内在化された母語話者志向性を可能な限り取りのぞき、日本人としての価値観や慣習などを付与することである。もちろん、日本人以外の非英語話者にはその民族固有のものが付与されるべきである。本稿で論じてきた日本人における「苗字の重視」は、そのような観点から考慮すべき事項である。例えば自己紹介では、“My name is Yamada.”と苗字のみで表現する文があってもよい。もしそれでは下の名前と勘違いされるというのならば、“Yamada [It] is my family name.”と付け加えればよいだろう。第三者の紹介では、“This is my friend Sato.”や、少々大胆に「日本式英語」として“This is Sato-kun/san”などと表現してみることも考えられる。これは相手への呼びかけの際にも、“Sato-kun/san, …”というふうに使うことができよう。また、このような日本人登場人物の発話に付随する態度として、握手ではなくお辞儀を導入することも考えられる。本名（2003）によると、インド人やタイ人は合掌しながら、英語であいさつすることがあるという。それを日本人に置き換えて考えれば、お辞儀をしつつ苗字を名のするという仕方も可能であろう。

その他にも、インド英語には“your kind information”, “kind presence”や、名前の尋ね方として“Your good name, please?”など、丁寧な表現が目立つそうである（本名 2003）。「苗字の重視」のみならず、日本独自の英語としては、森住（2008a）が言うように、「粗茶ですが、どうぞ」といった「控えめの美德」を表現することなどもひとつの可能性として考えられる。異文化理解教育としての英語教育を進展させるために、どの程度「民族独自の英語」の要素を組みこむべきかは、今後検討すべき課題であろう。

## おわりに

以上、第1章では教科書に現れた日本人における呼称の問題について、第2章では日本人と「苗字の重視」について論じてきた。教科書における日本人の呼称に関しては、下の名前だけの使用が最も多く見られる一方で、自己紹介における苗字のみの使用は皆無であるなど、日本人のアイデンティティや価値観への配慮の不十分さが窺えた。また、「苗字の重視」については、苗字の使用が日本人の精神構造に深くかかわる談話規則であることを究明した。第3章で検討したように、日本人の使う英語として、苗字の使用を教科書に組み込むべきであろう。今後、日常においてさまざまな文化的背景をもった人々との交流の機会は、ますます増えていくと予想される。そのような社会において英語教育がなすべきことは、英語という大言語を教授することによって、世界の多様な言語や文化を不可視の状態にすることでは無論ない。むしろ、今日の英語教育は、言語や文化そのものへの関心を深めることや、異文化理解の促進に資するものであるべきだろう。そのためにも、母語話者志向からの脱却、および民族独自の英語への方向転換の必要性を筆者は感じるのである。

しかしながら、冒頭に述べたように、急進的な改革はかじ取りを見誤る危険性があるだけでなく、文法、語彙、発音などの評価の基準をめぐって、学習者の混乱を招くような事態にもつながりうるだろう。そう考えると、民族の精神に大いにかかわる問題でありながら評価の基準

への影響は少ないという意味で、「初対面の場における呼称」への配慮は、さしあたっての改善として妥当なものではないだろうか。今後は、さらに具体的にどのような発話例が考えられるか、初対面の場への日本人のアイデンティティの組みこみ方を検討していくつもりである。

## 注

- (1) 中学校学習指導要領 (外国語編) では 1989 年度、1998 年度 (現行) 版と、目標に「コミュニケーション」能力の育成を掲げている。筆者は、この現在の英語教育の方向性に関して必ずしも賛同するものではないが、このことに関して論ずることは本稿の趣旨ではないため他の機会に譲る。
- (2) 姓/名、ファミリーネーム/ファーストネーム、など表記の仕方は様々であるが、本稿の文中では、日本社会において一般的に広く使用される「苗字/下の名前」という表現を主に採用する。
- (3) 複数の英語の容認に関しては、本名 (1999,2003)、森住 (2008a,2008b)、矢野 (2004)、Jenkins (2007,2009)、Kachru,ed. (1992)、Kirckpatrick (2007)、Morizumi (2009)、Murata&Jenkins,eds. (2009)、Smith,ed. (1983,1987)、Yano (2001)、などを参照されたい。

## 引用文献

- 土居健郎 (2007) 『「甘え」の構造 増補普及版』 弘文堂.
- 芳賀綏 (2004) 『日本人らしさの構造－言語文化論講義』 大修館書店.
- 日野信行 (2003) 「国際英語の教材」『言語文化研究』 29 号 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 本名信行 (1999) 『アジアをつなぐ英語－英語の新しい国際的役割』 アルク.
- (2003) 『世界の英語を歩く』 集英社.
- 久野暲 (1977) 「英語圏における敬語」『岩波講座 日本語 4 敬語』 岩波書店.
- 鈴木孝夫 (1999) 『日本人はなぜ英語ができないか』 岩波新書.
- 高島敦子 (1992) 『これでよいのか英語教育』 新評論.
- 武光誠 (2007) 『知っておきたい日本の苗字と家紋』 角川ソフィア文庫.
- 谷崎潤一郎 (1947) 『痴人の愛』 新潮文庫.
- Jenkins, Jennifer. (2007) *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*. Oxford: Oxford University Press.
- (2009) *World Englishes: A Resource Book for Students*. New York: Routledge.
- Kachru, Braj. (1992) 'Teaching World Englishes.' In Kachru, B (ed.) *The Other Tongue: English across Cultures*. 2nd ed. Urbana, IL: Universty of Illinois Press. 355-365.
- Kirkpatrick, Andy. (2007) *World Englishes: Implications for International Communication and English Language Teaching*. Cambridge University Press.
- 文部科学省 (1998) 『中学校学習指導要領』.
- 森住衛 (1997) 「英語に表れる日本人名の表記法」『渡邊時夫教授還暦記念論文集－英語教育における創造性』.
- (2008a) 「EIAL の一例としての「日本英語」－その目指すべき方向を求めて」日英言語文化研究会編『日英の言語・文化・教育－多様な視座を求めて』 三修社.
- (2008b) 「日本人が使う EIAL－立脚点・内実の方向性・教科書の扱い－」『アジア英語研究』 第 10 号 日本「アジア英語」学会編.
- Morizumi, Mamoru. (2009) 'Japanese English for EIAL—Its Standpoints, Substance and Introduction in the Textbooks' in J. Jenkins and K. Murata *Global Englishes in Asian Contexts: Current and Future Debates*. Palgrave-Macmillan, 73-93.

- Murata, K and Jenkins, J., eds. (2009) *Global Englishes in Asian Contexts: Current and Future Debates*. Palgrave Macmillan.
- 中村敬 (2004) 「アメリカナイゼーションと戦後教育」, 津田幸男・浜名恵美共編『アメリカナイゼーションー静かに進行するアメリカの文化支配』, 研究社. 115 – 133.
- 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係』 講談社.
- Smith, Larry E., ed. (1983) *Readings in English as an International Language*. Oxford: Pergamon.
- (1987) *Discourse across Cultures: Strategies in World Englishes*. New York: Prentice Hall.
- 外山滋比古 (1976) 『日本語の個性』 中公新書.
- 和辻哲郎 (1991) 『風土－人間学的考察』 ワイド版岩波文庫 岩波書店.
- 矢野安剛 (2004) 「『外国語としての英語』 から『国際語としての英語』 へ: 英語教育再考」 早稲田大学大学院編『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』 第 14 号.
- Yano, Yasukata. (2001) 'World Englishes in 2000and beyond.' *World Englishes*, 20(2), 119–131.

## 調査に使用した教科書

- 堀口俊一ほか (2005) *TOTAL ENGLISH 1,2,3* 学校図書.
- 笠島準一ほか (2005) *NEW HORIZON English Course 1,2,3* 東京書籍.
- 松本茂ほか (2005) *One World 1,2,3* 教育出版.
- 佐野正之ほか (2005) *SUNSHINE ENGLISH COURSE 1,2,3* 開隆堂.
- 高橋貞雄ほか (2005) *NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 1,2,3* 三省堂.
- 東後勝明ほか (2005) *COLUMBUS 21ENGLISH COURSE 1,2,3* 光村図書.